

プロフィール

米国の大学（国際関係学部）卒業後、日本の大学にて修士号（国際関係学修士）を取得。国連広報センター（インターン）、在ザンビア日本国大使館（専門調査員）、国際 NGO ワールド・ビジョン・ジャパン、在ウィーン国際機関日本政府代表部（専門調査員）を経て、本事業に参加。本事業を通じ、平和・開発分析官（Peace and Development Analyst）（東部・南部アフリカ地域担当）として勤務し、任期満了後、任期を延長し同職にて引き続き従事。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

大学3年次にウガンダ共和国に留学した際に、子ども兵士の存在について知り、アフリカの紛争及び平和構築に関心を持ちました。その後、修士課程においてウガンダ北部における元子ども兵士の社会復帰について論文を執筆しました。修士課程修了後に、実務を通じて平和構築分野に携わりたいことを希望していましたが、新卒の時点では同分野における実務経験が乏しく、その後数年間の勤務経験を通じ、同分野に沿ったキャリアの構築を模索していました。本事業は、まさに平和構築の現場における人材育成を目的としており、特に、約1年間の海外派遣を通じてフィールドにおいて経験を積める点に魅力を感じ、応募に至りました。

2. 国内研修に参加した感想は？

国内研修の特徴及び利点として、インプットとアウトプットのバランスの良さが挙げられると思います。分析、計画、調整及び管理等、国連での業務及び取組において重要な要素を座学のみならず、グループワークやロールプレイ等を通じて実践する機会がありました。海外からの研修員を交えて行ったグループワークでは、成果物の発表まで時間が限られる中、グループの方向性が決まらなかったり、グループ内で意見が対立したりしたこともありましたが、異なる意見がある中で、いかに中間点や共通点を探し議論をまとめるかを意識したことは、現在の仕事にも活かしています。

また、国内研修で特に印象に残っていることは、講師の何名かが、ご自身も本事業の修了生であり、国際機関で経験を積まれた後に「その道のプロ」として本事業の講師を務められたことです。ある講師とは、海外派遣期間中のニューヨーク出張の際に再会し、国内研修を経て現場で業務に携わってみて感じたことなどについてお話させていただく機会がありました。本事業修了後にも、メンターのように気にかけてくださる講師の方々と繋がりを保てることは、今後のキャリアを積み上げていく上でとても心強いです。

さらに、海外からの研修員を含め、約5週間の国内研修を通じて仲を深めた同期とは、悩みを共有し、励ましあい、お互いの成功や成長を心から喜びあえる関係になりました。海外派遣期間中の心の支えであったのはもちろんのこと、今後も一緒に切磋琢磨していきたいです。



- ◇ 国内研修中のグループ発表の様子。発表内容に対する講師の方々のフィードバックからも、新たな視点を得ることができた。

3. 業務内容について教えてください。

国連開発計画（UNDP）と国連政務・平和構築局（DPPA）の共同プログラム（Joint UNDP-DPPA Programme）を通じて各国に派遣される平和・開発アドバイザー／分析官（Peace and Development Advisor/Analyst（PDA））は、ある国を担当する場合、国連常駐調整官事務所（RCO）所属になります。しかし、私と上司のチームは東部・南部アフリカという地域を担当しているため、業務の報告先が、国連開発事務所（UNDCO）アフリカ地域事務所、UNDP アフリカ地域サービスセンター及びアフリカの角（つの）特使室の3機関存在するという、特殊かつ複雑な形態です。

PDA の主な業務内容としては、派遣された国の紛争予防にかかる能力強化支援が挙げられますが、地域担当の役割には、担当地域各国に派遣された PDA の支援も含まれます。取組の一例として、PDA 同士で意見・情報交換をしたり、外部専門家からテーマ別事項につき学んだりするセッション等の機会の提供が挙げられます。

デモや SNS 上のフェイクニュースの拡散等が選挙の前後に行われ、治安悪化が懸念されるアフリカ地域では、平和裏に選挙を実施するために国連側のアプローチが重要な役割を果たします。そのため、2023年に選挙を予定していた南部アフリカ地域の4か国（ジンバブエ、エスワティニ、モザンビーク及びマダガスカル）に常駐する PDA を対象とした Peer Meeting を主催し、平和裏に選挙を実施するために、PDA としてどのように各国関係者に働きかけ、その過程でどのようなグッドプラクティスが見受けられたかにつき意見交換を行う場を設けました。

また、紛争予防を念頭に置いた情勢分析も PDA の業務の一環であるため、上司が主体となっていく分析業務において、私は情報・データ収集、グラフ・図及びプレゼン資料作成等を担当しています。情勢分析の内容及び結果が、内部の意思決定に活用されることもあるので、意義深い業務であると感じています。

さらに、UNDP の同僚とともに、「紛争予防アカデミー（Prevention Academy）」という研修を南部アフリカ 10 か国の UNDP 国事務所の職員に対して実施しました。同研修では、紛争予防のコンセプト、戦略及び手法等について UNDP 職員に対し指導及び助言を行います。私は講師の一人として、紛争予防の戦略を用いて、南部アフリカにおいて UNDP としてどのような支援を実施すべきかに関するディスカッションを主導しました。現場においてより良い支援が実施されるよう、職員の能力開発を支援することも、紛争予防及び平和構築にかかる重要な取組の一つであると実感しています。



- ◇ ナイロビにおいて開催された YouthConnekt Africa Summit 2023 において、UNDP の若者担当の同僚たちと。総人口の約 60% を 25 歳以下の若者が占めるアフリカ地域では、平和への取組における若者の参画が重視されている。（写真提供：Amel Ouchenane）

4. 海外派遣での感想は？一番印象に残っていることは？

私自身が関わった業務の中で特に印象に残っているのが、AI を活用し、主にオンラインのメディアソースから、アフリカの角地域における民族間紛争やデモ等の安全保障に関わる事象を検出するプロジェクトの開発です。同プロジェクトを通じてそのような事象を効率的に検出することで、紛争予防や平和構築の取組においてより良い意思決定がなされ、国連による早期の対応が可能になることが期待されます。官僚的と言われる国連において、イノベーションを駆使したプロジェクトを立ち上げる過程に関わることができたのは、とても新鮮かつ刺激的な経験でした。紛争予防及び平和構築の取組において、他にどのようなイノベティブな手法があり得るだろうか、と自分でも考えるきっかけになりました。



- ◇ 右も左も分からず心細かった着任時、困ったことがないかよく気にかけてくれた同僚と、彼女の契約満了日に最後のツーショット。彼女が私にそうしてくれたように、新しいスタッフを見かけた際には、私も積極的に声をかけるようにした。

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

本事業における契約が満了を迎えた後、契約を延長し現在（2024年5月現在）も同職での勤務を継続しています。「予防は治療に勝る」という言葉があるように、本事業を通じ、紛争等の危機の予防に注力することの重要性を実感したため、今後も紛争予防等の分野に携わっていきたいです。

6. 事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

本事業参加前にも国際機関の空席公募に応募していましたが、書類審査を通過し、面接に呼ばれたことはありませんでした。他方、本事業参加中に応募した空席公募のポストのいくつかについては、候補者として選ばれ、面接に呼んでいただけました。私自身がそうであったように、どのようにして平和構築分野でのキャリア、ひいては国際機関でのキャリアの足掛かりを作るかで悩まれる方は多いと思います。本事業を通じた国内研修及び国際機関における勤務の機会は、まさにその足掛かりとなる重要な一歩をサポートしてくれるものであると確信しています。



- ✧ キリマンジャロをバックに、アンボセリ国立公園にて。赴任中は、文化や生活環境の違いから知らず知らずのうちにストレスを溜めていることがあるので、能動的にリフレッシュすることを心掛けた。